

〈研究ノート〉

## 釈道空短歌語彙「ひそけさ」「かそけさ」の消長

——第三歌集以後——

中西 洋子

はじめに

折口信夫・釈道空（以後道空）は研究論文と同様に、短歌制作の上でも独自の語彙を多く生み出している。中でも「ひそけさ」「かそけさ」は際立って輝きを放つ語彙と言っても過言ではないだろう。その輝きは常に同じではなく作品に接するたびに複雑で微妙な色彩をみせてやまない不思議な魅力を持つ。

このような二語に関して筆者は既に二編註の試論を済ませている。つまり初編では二語の造語としての誕生とその背景を、続編ではその複雑に変化する働きの諸相を追うと共に、造語による道空的抒情の独自性、多様性にそれぞれ迫ろうとしてきた。続く終編として本稿では、二語がどのように各歌集に浸透し消長を遂げていったか、さらに全歌集の中でどのような意義を持

つ語彙であったか。などを第三歌集以後の用例を検討しながら考えていきたいと思う。

まず続編において提示したように、各歌集に見られる二語の使用例を再確認しておきたい。

- A 『海山のあひだ』(22)
- B 『春のことぶれ』(28)
- C 『水の上』(19)
- D 『遠やまひこ』(12)
- E 『天地に宣る』(2)
- F 『倭をぐな』(8)
- G 『私家版自筆歌集』(2)
- H 『短歌拾遺』(3)

(以下、歌集名は記号で呼ぶ)

以上A～Fの歌集とG、Hの二集は二語の用例の合計数であり、全体では96例であった。加えて二語はほぼ同数と見られる。これにより二語が全歌集においてどのように分布しているかが把握出来るだろう。前半歌集A、B、Cの使用例数から後半歌集D、E、F、

Gの分布状態が目に見えて減少していくのがよく分かる。

一

ではさっそくC(『水の上』)から始めたい。

本歌集は一九四八年(昭23)好學社より『釋道空短歌綜集三』として刊行。一九三〇年(昭5)五月より一九三五年(昭10)七月(作者43歳より48歳)までの作品四六六首を収める。巻末の「追ひ書き」には「昭和五年五月以後、十年七月に到る間の作物、本で言へば、前歌集「春のことぶれ」につぐ、およそ、四百八十首をひと纏めに、仮りにつけてあった「水の上」といふ名をそのまゝの集を出す」とある(筆者註 歌数にやや相違)。

この時期も前歌集にひき続き、遠野、恐山、男鹿、南部、津軽、北陸、平泉、早池峰など主に東北探訪の旅を精力的に行ってきた。遠野では佐々木喜善が同行。また、春洋を伴っての三回目の沖繩旅行を果たした。しかし、南部や津軽旅行の後体調を崩したり(昭6)、信州旅行の途次、下川原で腰部神経痛の原因となる落

馬をするなども経験した。一方、短歌活動では「婦人公論」の歌壇選者（昭5）や改造社より創刊の「短歌研究」の選者（昭7）、或いはJOAKから「万葉集講座」を12回放送し（昭8）、古泉千樫七年忌法要・追悼会における北原白秋との講演（同）を務めている。

さらに研究活動では『古代研究』民俗学篇2の刊行（昭5）を始め、学位論文『古代研究』国文学篇中、万葉集に関する研究』により文学博士となる（昭7）。また、民間伝承の会を発足させた（昭10）。このように前年刊行した『古代研究』民俗学篇1および国文学篇の二冊と合わせて大きな柱となる研究成果が得られた五年間であった。

実生活における主な出来事では、同居中の藤井春洋が金沢歩兵連隊に入営し（昭6・1）、同年末除隊している。さらに春洋、國學院大學講師となる。また、姉あゐの死去、同居人の鈴木金太郎が大阪に転勤となり（昭9）、同年、春洋の療養のため夏中別荘を借りる。大阪木津の折口家から分家したのは次の年（昭10）であった。このように見ると実生活の上では、主として春洋に対する一般的な師弟関係以上の世話が顕著に

なつた期間であつたと言える。

作歌活動では『釈道空集』の出版（昭5、現代短歌全集13改造社）の他、ひき続き採訪旅行に取材した作品をベースに、居住する近辺や日常生活に取材した作品が多くみられる。このように東北、沖繩への採訪旅行、研究活動、作歌活動など前歌集『春のことぶれ』の間と変わらず精力的に行動しながら、全般的にどこか沈んだ気分のだよう印象を受けるのはどうしてだろう。この問題も合わせて考えていきたい。

では、『C「水の上」』における「ひそけし」「かそけし」活用形、複合名詞、既成の類似語も含む）はどのように用いられているだろうか。

まず、「ひそけし」から（傍線筆者）。

- 1 オホトシ 大歳の村をぞ思ふ。山々の冬木の立ちのあはれひそけさ
- 2 春はる既く 弥生の山となり行けど、黒木かこめる村の ひそけさ
- 3 うつそみの 人を思へり。咽喉ノドえごきしはぶしきる——こゑひそめつ、

- 4 忘れつ、音吹き起る山おろしに、なほひそやかに散る 花あり
- 5 ひそやかに すぎにし人か——。なには寺夕庭白く なりまさりつ、
- 6 いきのをに思ひ、そめて ありしかば、逢ふこともなく 人はなりつも
- 7 ひそかなる阪を越え来つ。山の木の深さとよみを 我は聴くなり
- 8 ひそやかに 蟬の声すも。こ、過ぎて、おのもくくに 別れけらしも
- 9 鳥の生まれになりゆく山なかに、来向ふ秋はひそけかりけり
- 10 ほのくと 思ひ見るすら雪深き 睦月の山は、ひそかなりけり

以上10首提示した。この内、造語「ひそけし」(活用形を含む)の用例は9と1、2である。9は連用形「ひそけかりけり」は「ひそけし」の連用形に過去の助動詞「けり」が加わった形であり、造語に数えられよう。名詞「ひそけさ」1、2は問題ない。

1は小題「正月籠居」4首の中の3首目の作。正月を家に籠もつて庭の落葉に積もつた霜を眺めたり、賀状の山を整理することもない。そうした何となく鬱々とした状態にあつて、民俗探訪の旅をしてきた村々の大晦日を思い出している。——生活のけしてらくではないあの村はどのような大歳の日を迎えるのだろうか。餅をつくことが出来ただろうか。めぐりの山々の、枯れて立つ木々のひそかなたはずまいがありありと眼に浮かんでくる——。年末の旅はこのすぐ前に「年かはる山」9首、その前には「発哺」9首が配置されており、9月末から12月に到る長野から北陸にかけての旅であつたと考えられる。「発哺」9首中には「黄な<sup>カシバ</sup>の樺の葉」や「穂薄」が歌い込まれ、「年かはる山」では歳末から雪降る正月の村の情景が抒情的気分を揺曳しながら描き出されている。最初の「山びとの言ひゆくことのかそけさよ。きその夜、鹿の 峰をわたりし」はよく知られた一首であつた。

一方2は続いて「寂しき春」5首の内、4首目に収録された作。村人の営む養蚕の出来具合や椎茸の生育を心配し、それに換える収益をひたすら頼みとしなけ

ればならない心細さに寄り添って歌われる。——見渡す山々は芽吹き始めて山鳥が鳴き、すでに春めいた装いであるが、そののどかさとは裏腹に黒木（この場合は針葉樹）に囲まれているこの村のひそけさは、一体どうしたことだろう。五首目「日のゆふべ つ、音聞きし宵遅く、春山鳥の つくり身を喰ふ」にわずかに見えるものの、人々の営みが何とも乏しく感じられる——。今さら言うまでもないが、道空の歌に登場する村は単なる通り過ぎて来た村々やその周囲の情景ではない。山道を難儀して訪れた村に何日か逗留して人々と親しく接し、生活状態を知り、まだ知られていない古くから伝わる祭や年中行事、土地に根付いた言い伝え、物語などを調査する対象としての村々であった。従って「ひそけさ」には村人やその営みの様々な事柄が含まれる。つまり、「ひそけさ」には既に用例をもって指摘してきたと同様の、「山々の冬木の立ち」を受けて用いたのではなく、「大歳の村」をもふくめた用い方であったと理解するのが穏当であろう。9では、そうした村や村人の営みとは無縁の、周囲の情景描写のようにみえるが、「鳥」という生き物に関わる点での

用例として納得出来る。

他に類似的用例としては3「声ひそめる」6「思ひひそめる」、4「ひそやかに散る 花あり」5「ひそやかにすぎにし人か」。8「ひそやかに蟬の声すも」。7「ひそかなる阪を越え来つ」。10「睦月の山は、ひそかなりけり」などがみとめられる。この内、3、6はそれぞれ「声」「思ひ」という人間に関わる言葉を受けており、問題のない用例である。また4、5、8では5と8はそれぞれ「人」「蟬」に関して人間、生き物という点で問題ないが、4では「散る花」に対して用いている用例であるのが注意を引く。中にはこうした例外もあるのだろう。一方10は形容動詞「ひそかなり」に過去の助動詞の加わった形である。こちらも睦月の山を受けてとらえられているが、上句の抒情的气氛に支えられての用例と見ておきたい。

では「かそけし」の方はどうか。

1 雪ふみて、さ夜のふかきに還るなり。われのみ  
立つる音の かそけき

- 2 山びとの 言ひ行くことのかそけさよ。きその  
夜、鹿の 峰をわたりし
- 3 正月の山にしづる、雪のおと——。かそかなり  
けり。ゆふべに聴げば
- 4 行きつ、も 餌啄<sup>エバ</sup>みとほしき鳥のこゑ——国の  
境の山の かそけさ
- 5 深山木の 冬のしげりの 深き山。たゞひと木  
ある花の かそけさ
- 6 夏山の青草のうへを行く風の たまさかにし  
て、かそけきものを
- 7 元日の山に、消えゆく暫くは、鉄砲のおとも  
かそけく 思ほゆ
- 8 山びとの 歳木樵りつむ音ならし。夕日となれ  
る庭に かそけき
- 9 山窪の草敷 ふかく入り来たり、松の花散るか  
そけさを 見つ
- 10 山中に来入り かそけき心なり。松の葉黄<sup>ミドリ</sup>は、  
伸びはてにけり
- 11 除夜の鐘なりしづまりぬ。かそかなるそよぎを  
おぼゆ。門松のうれに
- 12 かそかなる睦月の 山の昏曇り。ひたすら聞ゆ。  
枯れ原の おと
- 13 ひとり神我を おふし、我が姉の、言ひし語<sup>コト</sup>こ  
そ かそけかりけれ
- 14 草の葉に てんたう虫の居る音も、かそけき山  
の音に 立ちつ、
- 15 をさな等は いづこにゆきて生きぬらむ——。  
かそけく思ほゆ。親々の願ひ
- 16 鶯の身じろく音の あはれなり。命死なざるも  
の、かそけさ
- 17 よむ歌も みな心になひ行く やみてこの頃  
かそかなるらし
- 18 春深き信濃の寺に、思へども——、かそけかり  
けり。父母のうへ
- 用例は以上18首。この内、2、4、5、9、16が名詞として、また1、6、7、8、10、13、14、15、18の9首が形容詞としてそれぞれ用いられている造語である。他に類似語として形容動詞「かそかなり」が3、11、12、17の4首。先の「ひそけし」に比して複

雑な類似語が少ない。

すでに指摘したように、造語「かそけし」は多く物音に関して表現されてきた語であった。1は巻頭に続く「山霞む日」五首の内の最後尾の作。いずれも民俗採訪で訪れた山深い夜の情景を歌ったものであり、互いにひびき合って連作を形作っている。四首目の「木立深くふみゆく足の、たまさかは、ふみためて思ふ。山の深さを」、とともに夜深い木立の中にあつて、山の深さを実感しつつ雪を踏むという、自分の立てる音について用いたものである。雪を踏む自らの足音を聴くことからは内省的な気分が濃厚に伝わってくる。

ただ、二句三句にある「さ夜のふかきに還るなり」は、この一首のみでは何が還るのか、意味がよく読みとれない。右の四首目、あるいは三首目の「山の夜に音さやさやし、聴えゐて、夜ふくる山の霧をおもへり」とも合わせると、夜の深さの中に音が戻ってゆくとも考えられる。

これに関連して、右の三首目について次のような読みがある。紹介しておきたい。<sup>注4</sup>

・聴覚から山の夜霧を想起するという視覚への展開が、少し唐突な感じもするが、清澄な印象をおぼえる歌である。(一ノ関忠人)

・都会の霧と違って、山深い所の霧はしめやかな音まで立てて流れて行くのであろうかという感慨には、都会人道空の好奇さが表れているように思うのだが。(畠山英治)

・どの歌ものびやかな韻きだ。深い山中での思いを、静かだけれど深く湛えている。(中略)一瞬を切り取るのではない長い時間の経過であり、同時に山の生活のどの時代の誰もが聞いた韻きともなる。(成瀬有)

・第三句「聴えゐて」が深い。凄然と流れる夜空の水滴に思っている。「霧をおもへり」というのも、つぎのうたに「……思ふ。山の深さを」とあり、そのさきには「さ夜のふかきに還る」(≡音が闇に吸い取られて行く)とある、ぜんぶ同一のことを詠む、と知られる。(藤井貞和)

・「山の夜の」という表現は山の音というよりも、これは夜の音。このほうが空間に広がりを持ち、

「さやさや」という音を自然なものにしている。家の中で、あるいは夜の床の中で、全身で聴いているのである。(中井昌一)

五首の内、この三首目を境にして四、五首は雪を踏む自らの音を聴く歌になっている。右の五人からはそれぞれ歌に沿った見方を示しながら、全体としてよくまとまった印象を受けた。ことに傍線部分の、一瞬を切り取るのではなく長い時間の経過があること。そうした山の生活のどの時代の誰かが聞いた韻きともなる。ととらえた成瀬の見方により道空的な近さを感じた。また、「山の夜の」は多く夜の音に重心があつて、このほうが空間に広がり、「さや／＼」という音を自然なものにしている。と述べる中井の鑑賞にも注目した。

なお、「さ夜のふかきに還る」については藤井貞和が(一)内のように「音が闇に吸い取られて行く」と解釈した。この発言に従って鑑賞することにした。聴覚の恐ろしいほど研ぎ澄まされた一首だとあらためて思う。

2は名詞としての用例であるが、ここでは「山びとの言ひ行くこと」に対して用いられており、通常ではない点に注目される。同じく諸氏の「かそけさ」についてのとらえ方に触れてみたい。

・山人は新しい年を迎える厳かな気持ちのなかで、峰を渡る鹿をみた。(中略)その興奮を心に残しつつ、平地人に、見たままの光景を単に事実を告げるように語った。そのような語り方では、鹿の神聖さに反応する平地人はいなかった。「かそけさ」は、山人の言葉が宙に浮いたような形になっているのを言ったのではないか。(畠山英治)

・鹿の話を誰かにするのを山人から聞いた時、まず知識としての「鹿」だったのだろう。が、「山びと」は「民俗」に関わりがないかに告げて去る。鹿にまつわる民俗を、「山びと」は知識として知っているのではない、との韻きを聞く。劇的に告げられたのではない。かすかな痕跡としての民俗の在りように、深く頷いている道空では

ないか。この一首にも《温かさ》がある。あわあわと消えてしまいうそでありながら、内実としか言いようのないものを感じたとの《温かさ》を交えた「かそけさ」と解したい。

(成瀬有)

・道空を代表する名歌である。(中略)しかし突っ込んで質問されると、容易に答えられない難解なところがある。まずは「かそけさ」、次いで「鹿の峰をわたりし」と、どうして「山びと」は知りえたのか。「かそけさ」は、ただひそひそと言うのではなく、慎みをこめたもの言いと、それを聞く作者の不思議と同意の気持ちを含めた表現である。

(中井昌一)

なお、一ノ関と藤井は「かそけさ」そのものについて直接にも触れていないが、一ノ関は「(前略)挨拶の言葉とはいえ、山の鹿の動向が話題になるような生活の静寂を、道空はいとおしんでいるような感触をこの歌はもっている」と述べている。この「山の鹿の動向が話題になるような生活の静寂」が「かそけさ」

の意味するところであろう。それを「いとおしんでいる」という道空の思いにまで届こうとしている読みだ。そして成瀬の傍線部分の《温かさ》にこれは通じている。また、「ひそけさ」は「(前略)慎みを込めたもの言い」であり、「それを聞く作者の不思議と同意の気持ちを含めた表現」とする中井の読みにも重なる要素を見ることが出来るのである。

つまり道空の用いる「かそけさ」の中では明らかに例外であると認められる表現である。普通ならば「ひそけさ」とあるべきである。にも関わらず「かそけさ」とする必然性はどこにあるのだろうか。畠山に「山の神聖さ」という言葉が見られるが、飛躍を承知で言うならば「山」という自然そのものを神聖視するところから用いた表現だったとも考えられよう。「ひそけさ」「かそけさ」にはこうした例外的用例があつて、理解に苦しむ。しかしまた同時にそれ故に却って味わい深さが生まれることを承知しなければならぬと思う。

形容詞としての用例では、10の「山中に來入りかそけき心なり、松葉の葉黄は、伸びはてにけり」が見られる。ここでは連体形として「心」にかかっているが、

やはり上述の「かそけさ」と同様の用い方であるのは明らかだ。また、13では「我が姉の）言ひし語こそかそけかりけり」とあって、形容詞連用形に過去（或いは詠嘆）の助動詞終止形が加わったもの。やはり10の場合と同様の用例である。

14では音にかかる用例で問題なく、15は「思ほゆ」にかかる用例で、10の場合と同様。16も「命死なざるもの」を受けたかたちとなっており、こちらも10と同様である。また18でも「父母のうへ」にかかっており、これもまた10と同様の用法であった。

さらに形容動詞をみると、3では「雪の音」を受け、11では「（門松のうれの）そよぎ」に、12も「枯れ原のおと」にそれぞれかかっており問題はない。また17は「やみて（病みて）この頃」をうけての用法であり、10に含まれる。

つまり、造語「かそけし」は「ひそけし」とともに道空が示した用法の区別をはみ出して、或いは混同して「ひそけし」的に微妙なニュアンスを表現するのに用いられていると言えるのではないだろうか。『水のうへ』はこうした点に特徴が認められる。そういえば

第一歌集『海山のあひだ』にもすでに「若松のみどりいきる、山はらに、わが足おとのいともかそけさ」、「人も馬も道ゆきつかれ死に、けり。旅寝かさなるほどのかそけさ」などが見受けられたことも忘れてはならない。時と場合に応じて柔軟に用いようとしたと考えてもよいのだろう。

二

続いてD第四歌集『遠やまひこ』を見ておこう。同集は一九四八年（昭23）三月一日好學社より釋道空短歌綜集三『水のうへ』に相次いで同綜集四として刊行された。ここには一九三四年十一月（昭9）より一九四一年（昭16）五月（作者四十八歳から五十四歳）までの作品四八二首を収める。その内、六三三首の作品（改作を含む）がE『天地に宣る』より再録されたものという。Cにひき続きこの間も民俗採訪旅行に余念なかった。平泉の延年の舞・早池峰の神楽の見学、信州小谷温泉旅行（下川原で落馬）、春洋を伴った三回目の沖繩採訪旅行、山形県の黒川能の見学、箱根明神ヶ岳（道に迷い一夜野宿）、近江比良山（道に迷い一夜

野宿)、大和万葉旅行、東北民謡試聴団の旅行に参加、中国に旅行し北京にて講演する。などなどである。

一方、研究、学会、短歌に関する活動では民間伝承の会の発足、國學院郷土研究会大会における講演「琉球国王の出自」、「短歌研究」に連載し始めた「新古今前後」、短歌文学全集『釋道空篇』の刊行(第一書房)、『新万葉集』の選歌、自選歌五十首を『新万葉集』に掲載、J O A K 国民講座における「短歌の歴史」「短歌の本質」「短歌の鑑賞」の放送、小説「死者の書」を「日本評論」に掲載、自選歌の朗詠をコロムビア・レコードに吹き込む、抒情詞曲「山家集」をJ O A K で放送、京都帝国大学史学科特別講師として神道を中心にした特別講義、日本文学大系『近代短歌』の刊行(河出書房)、J O A K 国文講座における「明治時代の短歌」放送、宮中歌会始の儀の召人となる、室生犀星との対談「古典について」を雑誌「むらさき」に掲載、『橘曙覧評伝』を刊行(教学局)する。など民俗探訪旅行と平行して精力的な活動と収穫が認められる。研究、短歌活動ともに油の乗った充実した年代であった。

なお、この時期の身辺をみておこう。先ず姉のあ

の死去(五六歳)、門弟の鈴木金太郎が大坂へ転動する、二十一年間の同居であった。藤井春洋の療養のために北軽井沢法政大学の別荘を借りる。叔母えいを家に招く。大阪木津の折口家から分家する。箱根仙石原に山荘「叢隠居」を建て休暇の大半を過ごすようになる。太平洋戦争が起こり藤井春洋応召する。などが挙げられる。鈴木金太郎の転勤や「叢隠居」を建てたこと、春洋の応召がその主な出来事であった。<sup>注6</sup>

ではこの歌集では「ひそけし」「かそけし」(活用形、複合名詞、既成の類似語も含む)はどのように用いられているだろうか。

まず、「ひそけし」から(傍線筆者)。

- 1 波の音暮れて ひそけし。火を消ちて 我はく  
だれり。百モ、デヤナ按司の墓
- 2 崖したに 干潟ひろがり物もなし。ひそけきゆ  
ふべ 浪のよる音
- 3 寺の子は 寺の子さびて遊ぶなり。声に立てど  
も、音ぞひそけき

- 4 海工廠の町に入り来て、あまりにも 春ひそけきを 思ひつつ、とほる
- 5 桜の後 風荒れ過ぎぬ。山なかは 真ま日ひひそけ  
く、霜崩えの音
- 6 たゞ一人 ふたりと 肩を並べ行き ひそかに  
別わかる、こと 欲ほらむか
- 7 大家家は 響きといふも稀なれば、ことひそや  
かに 妻つまとの言ことばふ

以上7首提示した。この内、造語「ひそけし」は1、2、3、4、5の五例、6は形容動詞「ひそかなり」の連用形、7は形容動詞「ひそやかなり」の連用形である。

1〜5における造語の用い方をみると、1の終止形「ひそけし」はすぐ前の「波の音暮れて」に対して用いられている。この作は沖繩探訪旅行に取材した連作「はるかなる島」九首の一首。場所は源為朝の舟はてしたと伝える国頭郡運天港の辺りの日暮れどき、崖の高処、低処の至る処に古代の按司の墓と伝えて、甕に骨を収めた塚穴が幾十となく散在していると、道

空は説明している。按司は地方首長に対する呼称。後に王族の一族に任じられたという。いずれにしても高い身分である。こうした背景から想像できるのは、港に近い崖下に点在する数多くの（按司の）骨壺の情景である。波の音が聞こえるだけのうす暗さと静かさであった。それはどこでも見かける空間ではなく、（按司たちの）墓場という尋常ではない景観であった。それを「火を消ちて」見たというのである。道空にとつて三度目の、沖繩探訪旅行における初体験の場所であったことだろう。按司の骨壺ではなかったが、かつて筆者も沖永良部島おきのえらぶしまで似たような体験をしたことがあった。そこは骨壺がひしめくように集められており、遺骨が壺からはみ出しているという、昼でも薄暗い窪地の墓所であったと記憶している。

百モモヤナ按司の墓の歌はこの一首のみでただ事実だけを客観的に詠っており、情情的な言葉は一切みられない。それが却って現場の凄さを物語って効果的である。加えてこの場合の「ひそかなり」は「波の音」に対して用いられており、作者本来の用例からすれば「かそかなり」とあるべきだが、外れている点に注目される。

墓が按司という人間であることに関わるからだろうか。

そういえば、2、3、5にみられる「ひそけき」「ひそけく」も「音」に関わって用いられていたことに気づく。

2は「波の色」八首中の三番目の作。一連の場所は新潟柏崎の浜辺、海風が吹き、佐渡も見える夕べの広い風景である。この場合も1と同様「(浪のよる)音」が「ひそけきゆふべ」に関わっており、「かそけきゆふべ」ではなかった。3は「曾我の里」十一首中の六首目の作。場所は小田原市の東、曾我山西麓一帯の地。五首目に「曾我寺の岡にのほれば、ゞ」とあり、「寺の子」はこの寺を指すのだろう。曾我氏ゆかりの寺である。ここも民俗探訪旅行の場所であった。直前の作に、曾我寺を訪れた道空は寺の子らが古木の仏像を眺めて遊んでいる様子を見て「ひそかなる笑みをこらへぬ。」とある。「笑み」に対して「ひそかなる」は本来の用例である。しかし3では「声に立てども、音ぞ」に対して「かそけき」ではなく「ひそけき」が用いられている。やはり道空の意図するところがあってのこ

とだろう。5は「夏鳥」一五首中の九首目の作。場所はどこかの山村のようだ。民俗探訪の徒歩による旅であるが、一連には地名が一箇所もない。この直前の「湘南電車をおりて」に続き編集されているところからすると、伊豆半島北部の国市辺りかと思われる。一連の八首目(3がこれに続く)に「山峡の一樹の桜 見えてゐて、暮れゆく村に、こよひ寝むとす」とある。当地は長岡温泉で知られた場所。

『折口信夫手帖』(昭62・10折口信夫博士記念古代研究所編集・発行)によると、一九四三年十一月末(昭18)、上京した叔母えいと加藤守雄を伴って古奈温泉に遊び、翌日長岡温泉に一泊した、と記されている。しかし一連の季節は辛夷が散り、桜が咲いているか終わる春深い頃である。しかも一首目に「今日も とほしき村をのみ 過ぐ」、二首目に「山深く かく入り立ちて、我は還らじ」、十三首目には「からだ冷えつ、ひとり歩めり」などと詠われており、一人の旅であった。叔母や加藤を伴ったゆつたりした気分とはほど遠い、もの寂しさを噛みしめているような歩みであった。「我は還らじ」にはどのような思いが込められている

のか不明だが、強い意志と緊張を感じさせる。「山深く かく入り立ちて」に何かヒントが得られるかも知れない。とにかく一連の舞台は人里からさほど遠くない山村であった。

あらためて5の用例をみると、「ひそけく」は「真日(太陽)」に対して用いており、同時に「(霜崩えの)音」が重なる。昼の陽ざしに霜の崩れる音がするというのである。「真日」も「霜崩え」も自然現象に属しており、本来の用例ならば「かそけく」とあるはずだが、この場合も例外であった。

6は「孤独」五首中二首目の作。この後に続く「秋霜」七首中に「箱根明神ヶ嶽に迷ふ。十二月一日夜」とあって、日中戦争当時とこれから出征する兵士を送る折の歌であることがわかる。送られる兵士たちが肩を並べて行くのを見ながら、「ひそかに別る、こと」を願っているのだろう、と推察している。用例「ひそかに」は「別る、こと」にかかっておりこの場合何も問題はない。7は既成の類似語である。「山の端」二十二首中の二首目。その中ほどに「た、かひの年は かへりぬ。」「年譜（注）には『新万葉集』に自選歌五十首を掲載し

たとあって、一九三八年（昭13）の春もまだ寒い頃であった。「ひそやかに」は「(妻と)もの言ふ」につながつており、用い方は7と同様である。

一方「かそけし」はどうか。

1 若くして遊び暮らしてありし日を思ふ かそけさ。人知らえず

2 み冬つき日ねもす温（ヌグ）き（カ）積（カ）べに、音かそけしも。沙のうつろふ

3 如月の山のおくがに入り行きて、かそけきもの、音 聴かむとす

4 年暮る、山のそよぎの かそかなる幾ところを過ぎて、我は来にけむ

5 山の（スガル）螺螺のひとつ 出で入る道のうへに、立ちどまりつ、かそかなりけり

以上五首提示した。この内「かそけし」は1、2、3である。1の「かそけさ」は「若くしてありし」日を思ふを受けており、本来の用例ならば「ひそけさ」とあるところだが、この点に何らかの意図がうか

がわれよう。2及び3の用例ではそれぞれ音に直接関わっており、順当な用い方がされている。

4、5「かそかなり」は類似語である。4は「山のそよぎの かそかなる（幾ところを過ぎて）」と「山のそよぎ」を受けて、造語の場合と同様の問題のない用い方である。5の「蝶蝶」は蜂の一種でじがばちの古称、或いはじばちの異称とも呼ぶ。作者が山道を歩いている時飛来し、その音が「かそかなりけり」と用いられたのであった。やはり4と同様である。

## 三

以上用例を挙げて述べてきたように、迢空の造語の用い方には迢空がおおよそ思い描いた場合とは、揺れの幅（或いはずれ）のあることが判明する。あらためて確認すれば、人間や生き物に関わる場合の用例「ひそけし」と、自然現象をふくむ音や一般の物音に関わる場合の用例「かそけし」である。そこで再度、揺れの幅の内に入る全作品を、第一歌集に溯って列挙しておきたい。全歌集はすでに提示した本稿一の記号付きの表である。以下「ひそけし」「かそけし」の区別を

設けない。

- |    |                                      |
|----|--------------------------------------|
| 1  | 蛭の子のかづき苦しみ 吐ける息を、旅にし聞<br>けば、かそけくありけり |
| 2  | 若松のみどりいきる、山はらに、わが足おとの<br>いともかそけさ     |
| 3  | 誰びとに われ憚りて、もの言はむ。かそけき<br>家に、山びと、をり   |
| 4  | 人も 馬も 道ゆきつかれ死に、けり。旅寝か<br>さなるほどのかそけさ  |
| 5  | ゆきつきて 道にたふる、生き物のかそけき墓<br>は、草つ、みたり    |
| 6  | 山のうへに、かそけく人は住みにけり。道くだ<br>り来る心はなごめり   |
| 7  | この心 悔ゆとか言はも。ひとりの おやをか<br>そけく 死なせたるかも |
| 8  | 青空は、暫時曇る。軒深くこもらふ人の 息の<br>かそけさ        |
| 9  | 麦の花 ひそかなれども、目につきて咲きある<br>暮れを 風のさびしさ  |
| 10 | 如月の雪の かそけきわがはぎや。白き光りに                |

- 11 目をこらしつゝ、  
霰ふる雑木のなかに、ス 鍛うてる いとゞ 女メイト
- 12 横野の 空色の花 (『海やまのあひだ』)  
あかときを 散るがひそけき色なりし。志摩の  
の唄の かそけき
- 13 (略)わが歌のいぶせさ。／かくしつゝ、いとゞ  
さびしく ます／＼に、思ひかそかにえがた  
く(略)
- 14 山川の満ちあふれ行く／色見れば、／命かそけ  
く／ならむとするも
- 15 かそかなる 生きのなごりを／我は思ふ。／亡  
き人も、／よくあらそひにけり
- 16 霞ある児湯の高原／行くへなく 出でつゝ、遊  
び／かそけかりけむ
- 17 国遠く／この若き人を 住ましめて、／世のか  
そけさを 知れ／と 言ひつる
- 18 深川の 冬木の池に、／青みどろ 浮きてひそ  
けき／このゆふべなり
- 19 山中に／わが見る夢の／あとなさまよ。覚めて思  
ふも、かそけかりけり
- 20 秋にむかふ／やまのたつきの かそけきに／こ  
としは早く、／電ふりにけり
- 21 息づきて／かそけかりけり。／夏ふかき 山の  
木蓮イタヒ子に、／朱さす 見れば
- 22 ひそかの心にて あらむ。／旅にして、／ま  
た 知る人を／亡くなしにけり
- 23 たぶの木キのふる木の 杜に／入りかねて、／木  
の間あかるき／かそけさを見つ
- 24 朝闇に、／郭公クワクワが／近く鳴きにけり。／今日は、  
／ひそかの心にてあらむ
- 25 いとまつげて いなむ と思ふ。／晝ふけて／  
あるじの臥ネド処は、／ひそまりて居り
- 26 われの世のさびしきに、／ならひ ゆくならし。  
／かそけく生きて、／教へ子はあり
- 27 くらきまど。／今日も見てけり。／庭蔵の高処  
の牕は、／ひそやかに あり
- 28 見えわたる山々は／みな ひそまれり。／こだ  
まがへしの なき／夜なりけり
- 29 寺の子ども／わが前をさらず 語るなり。／山  
のかそけさは、なれがたきかも

- 39 ひそかなる阪を越え来つ。山の木の深きとよみを我は聴くなり
- 38 山窪の草藪 ふかく入りきたり、松の花散るかそけさを 見つ
- 37 風すぐる 四方の木梢のひそまりに、しはぶきしたり。長き この夜ら
- 36 忘れつ、音吹き起る山おろしに、なほひそやかに散る 花あり
- 35 山の湯の 外湯あかるき湯のた、へに、我ありけりと言ふが かそけき
- 34 深山木の 冬のしげりの 深き山。たゞひと木ある花の かそけさ
- 33 春はる既く 弥生の山となり行けど、黒木かこめる村の ひそけさ
- 32 大歳オホトシの村をぞ思ふ。山々の冬木の立ちのあはれひそけさ
- 31 山びとの 言ひ行くことのかそけさよ。きその夜、鹿の 峰をわたりし
- 30 歳深き山の、かそけさ。人をして、まれにもの言ふ、声きこえつ、 (『春のことぶれ』)
- 49 山のスガル蝶のひとつ 出で入る道のうへに、立ちどまりつ、 かそかなりけり
- 48 春深き信濃の寺に、思へども——、かそけかりけり。父母のうへ (『水の上』)
- 47 よむ歌も みな心にかなひゆく やみてこの頃かそかなるらし
- 46 鶯の身じろく音の あはれなり。命死なざるもの、 かそけき
- 45 をさな等は いづこにゆきて生きぬらむ——。かそけく思ほゆ。親々の願ひ
- 44 ほのくくと 思ひ見るすら雪深き 睦月の山は、 ひそかなりけり
- 43 鳥の声まれになり行く山なかに、来向かふ秋はひそけかりけり
- 42 ひとり神我ガミを おふし、我が姉の、言ひし語コトこそかそけかりけれ
- 41 鳥のこゑ 時々きこゆ。村の夜のひそまり行けば、とよみて聞こゆ
- 40 山中に來入り かそけき心なり。松の葉黄は、伸びはてにけり

- 59 波の音暮れて ひそけし。火を消ちて 我はく  
 だれり。百按司の墓
- 58 崖したに 干潟ひろがり物もなし。ひそけさゆ  
 べ 浪のよる音
- 57 若くして遊び暮して ありし日を思ふ かそけ  
 さ——。人に知らえず
- 56 山鳥の道に出で居ておどろかぬところを 過ぎ  
 て、なほぞ 幽けき
- 55 寺の子は 寺の子さびて遊ぶなり。声に立てど  
 も、音ぞ ひそけき
- 54 桜の後 風荒れ過ぎぬ。山なかは 真日ひそけ  
 くて、霜崩えの音 (『遠やまひこ』)
- 53 かそけくて 一代過ぎにし宮びとも、生けるそ  
 の日は、人をころしき (『遠やまひこ』)
- 52 旅にして聞くは かそけし。五十戸の村 五人  
 の 戦死者を迎ふ
- 51 海工廠の町に入り来て、あまりにも春ひそけき  
 を、思ひつ、とほる (『天地に宣る』)
- 50 夢の如 思ほゆるかも。悔い深き年も かそけ  
 く 過ぎにけらしも

- 60 わが兄の臨終に來し のどかなる思ひは、いと  
 も かそけかりけむ (『倭をぐな』)
- 61 かそかなる陸月の山に 入りゆきて、かへらざ  
 りせば、のどかならむか (『短歌拾遺』)

四

以上、「ひそけし」「かそけし」及び既成の類似語を  
 ふくむ全作品数98例の内、明らかに問題のない用例を  
 除くものを書き出してみた。それによると歌集別数で  
 はA 12、B 18、C 18、D 7、E 3、F 2、G 1、計61  
 例であった。前半歌集C、B、Aの順でその大方を占め、  
 後半歌集では一桁の少なさであることが明瞭である。  
 61例の考証、鑑賞については既に済ませてきたが、重  
 複を避けつつ再度簡単に説明と確認をしておきたい。

まず、1の「かそけく」は「吐ける息を旅にし聞け  
 ば」に、2の「かそけさ」は「わが足おと」に、3の  
 「かそけき」は「家に、山びと、おり」にそれぞれか  
 かり、4の「かそけさ」は「旅寝かさなるほど」を受  
 ける。また、5の「かそけき」は「生き物の墓」に対し、  
 6の「かそけく」は「人は住みにけり」に対している。

7の「かそけく」は「おやを死なせたるかも」にかかり、8の「かそけさ」は「こもらふ人の息」を受ける。9の「ひそかなれども」は「麦の花」を受け、10の「ひそけさ」は直接には「わがはぎ」にかかり、また「如月の雪」をも受けている。

11の「かそけき」は「女<sup>メ</sup>夫<sup>オ</sup>の唄」を受け、12の「ひそけき」は「散る」を受けると共に「(空色の花の)色」にかかる。13の「かそかに」は「思ひえがたく」にかかり、14の「かそけく」は「命」を受ける。15の「かそかなる」は「生きのなごり」にかかり、16の「かそけかりけむ」は「出でつ、遊び」を受ける。17の「かそけさ」は「世の」を受け、「知れ」にかかっている。18の「ひそけき」は「浮きて」を受け、「このゆふべ」にかかる。19の「かそけかりけり」は「覚めて思ふも」を受け、20の「かそけきに」も「やまのたつきの」を受け、21の「かそけかりけり」もまた「息づきて」を受けている。22の「ひそかの」は「心」にかかり、23の「かそけさ」は「木の間あかるき」を受け、「見つ」にかかる。24の「ひそかの」は22と同様「心」にかかる。25の「ひそまりて」は「あるじの臥所<sup>フシド</sup>」を受け、「居り」

にかかり、26の「かそけく」も「生きて、教へ子<sup>コ</sup>はあり」にかかっている。27の「ひそやかに」は「高処<sup>タカド</sup>の臆<sup>マド</sup>」を受け、「あり」にかかる。28の「ひそまりり」は「見えわたる山々」を受ける。29の「かそけさ」は「山」を受け、「なれがたきかも」にかかっている。30の「かそけさ」は「山の」を受け、「声きこえつ、」にかかっている。

31の「かそけさよ」は「言ひゆくこと」を受け、32の「ひそけさ」も「冬木の立ちのあはれ」を受ける。33の「ひそけさ」は「黒木かこめる村」を受け、34の「かそけさ」も「ただひと木ある花の」を受けている。35の「かそけき」は「言ふが」を受け、36の「ひそやかに」は「散る 花あり」にかかる。37の「ひそまりに」は「四方の木梢」を受け、「しはぶきしたり」へ韻いていく。38の「かそけさ」は「松の花散る」を受け、39「ひそかなる」は「阪を越えきつ」にかかる。40の「かそけさ」は「心なり」にかかり、41の「ひそまりは」「村の夜」を受ける。42の「かそけかりけれ」は「言ひし語<sup>コト</sup>こそ」に応じたもの。43の「ひそけかりけり」は「乗向かふ秋」を受け44の「ひそかなりけり」も「睦月の山」を受け

る。45の「かそけく思ほゆ」は「親々の願ひ」にかかり、「いづこにゆきて生きぬらむ」をも受ける。46の「かそけき」は「命死なざるもの」を受け止める。

47の「かそかなるらし」は「やみてこの頃」を受け、48の「かそけかりけり」は「父母のうへ」にかかっている。49の「かそかなりけり」は「立ちどまりつゝ、」を受けるが道に出で入る蝶螺にもかかわっていく。

50の「ひそけし」は「波の音暮れて」を受け、51の「ひそけきゆふべ」は「浪のよる音」にかかる。52の「かそけさ——」は「ありし日を思ふ」を受け、53の「幽けき」は「おどろかぬところを 過ぎて」にかかる。

54の「ひそけき」は「声に立てども、音ぞ」を受け、55の「ひそけくて」は「山なかは 真日」を受けている。56の「かそけくて」は「二代<sup>ヒトヨ</sup>過ぎにし宮人も」にかかり、57の「かそけし」は「旅にして聞くは」を受け、58の「春ひそけき」は「思ひつゝ、とほる」にか

かる。59の「かそけく」は「過ぎにけらしも」にかかり、60の「かそけかりけむ」は「のどかなる思ひは」を受ける。また61の「かそかなる」は「睦月の山に」にかかっている。

こうして見てくると「ひそけさ」「かそけさ」の用法は本来の範疇（領域）を超えて自由自在な入れ替わりが多数認められる。一例を挙げれば「心」は「ひそけさ」の範疇であつたが40では「かそけき心なり」と用いられ、50、51では「（波の）音」に対して「かそけし」ではなく「ひそけし」と用いられている点にも注目される。これは混用ではなく、歌そのものの気分、情調によって自在な選択がなされたのだからと考えられる。ふくらみや広がり、奥ゆきなどを配慮したものであつただらう。

さて、あらためてA～Gにみる数字の変化は何を意味するのだろうか。まず考えられるのは前半歌集A、B、C、少なくともDの時期までは、すでに説明したように民俗採訪の旅が多かつたことが指摘できる。Cの「追ひ書き」には、

山の歌の多いのは、民俗採訪の為に、自然わりあひ容易に成跡のあがる、山村旅行を重ねてゐた為に、さう言ふ人々・村々の印象がのこつてゐて、さうした動機を追及して行くと、つい其が出て来

るのである。

と述べる箇所からも容易に首肯できるだろう。「ひそけさ」「かそけさ」は道空が幾日もかけた山村旅行の中から生まれてきた独自の語彙であった。道空の旅に關する年譜は、歌集毎にその都度掲げてきたが、採訪旅行が目的の旅を自選年譜（ま）によりあらためて提示しておきたい。

明治四十五年（大正元年）二四歳 八月、志摩・

伊勢・紀伊に亘って、熊野廻りをする。同行生徒

伊勢清志・上道清一の二人。

大正三年 二七歳 三月、生徒六十六人卒業。即

日辞職。東上。生徒鈴木金太郎等十人と同居。三

浦三崎、赤城山、塩原温泉に遊ぶ。

大正五年 二九歳 一月、小田原に武田祐吉を訪

うて、万葉集の口訳をすることを漁められ、其為

事にかかる。

大正六年 三〇歳 八月、浜松・尾道・久留米に

講演する。続いて別府から、阿蘇・霧島・鹿児

島を経て大隅・日向を巡る。

大正八年 三十二歳 三月、会津に行き、鹿児島

へいく。七月、再、鹿児島へ行く。九月、長野県

東筑摩郡教育会東部々会に招かれて、和田村に講

演する。其後、長野県下各郡教育会に招かれて講

演することが多い。帰途、美濃郡上に入る。長野

諏訪郡玉川村に講演する。

大正九年 三三歳 三月、福岡に行く。七月、松

本市教育会に講演し、中房温泉に浴し、帰途、美

濃中津川を發足して、信濃下伊那郡の平谷・新野・

遠江奥山・山住から京丸・熊切・大井川・藁科川

に通じている路線に、民間伝承を採訪して歩いた。

大正十年 三四歳 七月から八月に亘って、琉球

に旅行。帰途、志岐の島に渡る。共に、ふおくろ

あ採訪のためである。

大正十二年（三六歳） 七月、琉球及び先島列島

民間伝承採訪旅行をする。九月一日、基隆から、

門司に帰着。翌朝、神戸に入り、東京大地震の噂

を聞く。

大正十三年（三七歳） 十月、三上永人同道、石

見国邑智郡口羽村に同人の生家を訪ふ。

大正十四年（三八歳）一月、房州千倉で、「日本文学の発生」第三稿を執筆し始める。以後、此為に、伊豆各地、殊に箱根に籠もることが多い。五月、第一歌集『海やまのあひだ』を改造社より刊行。

大正十五年（三九歳）一月、信州下伊那郡日開村新野雪祭り神事を見学し、引き続き、三州北設楽郡豊根村牧ノ島に、同村三沢の花祭りを見る。二月、修善寺、湯ヶ野、土肥を廻る。三月、島木赤彦亡くなる。信州諏訪へ会葬に行く。九月、上高地に遊び、又、修善寺から天城を越えて蓮台寺、下田に行く。

昭和二年 四〇歳 二月、遠江周智郡水窪町西浦所能の田楽を見学。三月、三州北設楽郡豊根村金越に花祭りを見学。五月、京都に壬生念仏を見学。六月、富山・金沢を経て、能登国羽咋郡・鹿島郡を採訪し、気多一宮に、学生藤井春洋の生家を訪ふ。八月、高知に行き、室戸崎を見る。伊予松山を経て、帰る。

昭和三年（四一歳）八月、名古屋市に講演、続いて能登半島を一周する。十二月、能登半島に採訪旅行する。

昭和四年（四二歳）八月、信州別所・上林・発哺の各温泉に遊ぶ。十二月、信州下伊那新野の雪祭りを見学、三州三沢の花祭り衆の家に滞留数日。昭和五年（四三歳）一月、第二歌集『春のことぶれ』梓書房より刊行。三州北設楽郡御園村足込に花祭りを見学。二月、遠州西浦田楽見学。五月、大和・京都に旅行。七月、日光湯本に遊ぶ。

自選年譜一は昭和五年で終わり、ひき続き自選年譜二により昭和十一年まで補うことにする。

昭和五年（四十四歳）五月、万葉旅行。八月、東北旅行。陸中遠野に入る。南部地方を縦断して恐山に到り、秋田、男鹿其他を廻り帰京。途中八戸まで佐々木喜善氏同行。十月、信州下伊那郡日開村新野に十日間滞在。

昭和六年（四十五歳）一月、長野・愛知旅行。八月、

南部から津軽への旅。十和田・三厩等初見。十月、南部行き。十二月、北陸旅行。

昭和七年（四十六歳）一月、雪祭り・花祭り見学、駿・遠・三地方に旅。五月、万葉旅行。河内及び山城南部を加へる。八月、福岡から鳥原・雲仙・霧島へ。殊に明礬温泉を喜び、三日逗留、鹿児島に入る。指宿・枕崎を経て、一路帰京。九月、岩手県から鳴子・坂田・鳥海山・鶴岡・秋田・瀬波を経て還る。十二月、山形県温海温泉に、『くぐひ』同人を会し、後一人旅。

昭和八年（四十七歳）一月、十日、信濃旅。八月、陸前青根に逗留。笹谷峠を越えて、山形に旧友花輪郡蔵を訪ふ。

昭和九年（四十八歳）一月、伊豆廻り。九月、信州神阪峠を越えて、木曾、飛騨、富山に出る。十月、石川県下探訪旅行。此月又、平泉の延年舞・早池峰の神楽見学。

昭和十年（四十九歳）一月、大阪から、金太郎・春洋・吉松姉弟と熊野廻り。六月西角井正慶・春洋と、栃木県那須・茨城県久慈を歩く。七月、小

谷温泉下川原で落馬。三日、妙高裏山を越えて還る。八月、小谷温泉に春洋を伴ふ。九月上旬、糸魚川に出、富山・岐阜を経て、東海道を廻つて還る。十月、波多・春洋と常陸金砂権現に行く。此月万葉旅行。伊勢・志摩・紀州・大和に渉る。十一月、十五日、春洋同行で沖繩に向けて出発。二十日那覇着。本島・離島に探訪を続ける。

昭和十一年（五十歳）一月二十三日午前七時那覇出発。午後一時大刀洗飛行場着。其夜宮島に泊る。六月、川祭り。七月先師三矢重松無先生歌碑除幕の為、同人十名下向。一人山形在白布高湯に残る。八月、那須大丸塚温泉に移る。九月、白骨温泉から高山に越え、大阪に出る。十一月、金太郎結婚。参列。春洋同行。帰途小万葉旅行をする。月末甲州に遊び一人別れて河口湖に向ふ。（傍線筆者）

以上自選年譜一、二をそのまま忠実に掲げた。このように明治四十五年（一九一二）より昭和十一年までを辿つてみると、傍線部分に明記した部分以外にも、北は恐山から南は離島を含む沖繩まで、時間のある限

りひたすら探訪旅行に費やされていることが明らかである。ことに、大正十四年のA、昭和五年のB、そしてCは刊行年は昭和二三年であるが作品の時期は「昭和五年五月より同十年七月（作者四十三歳より四十八歳）までの作品四六八を収める」とある通り、やはりこの時期に相当する。

さらにまた、自選年譜一、二の附記に

この集を読んで頂く方々の為に、何かの参考にならうかとの考へから、集中の歌に縁のある事を中心として、編纂方針を立てた。——昭和五年七月

此外、相当に大きい旅行で、忘れてゐるのが多からうと思ふ。旅行を記事の中心にしたのは、其によつて得た印象が、後多く歌になることが多かつたからである。

——昭和十二年一月——  
（傍点筆者）

と記するように、「集中の歌に縁のある事を中心として」、「其（旅）によつて得た印象が、後多く歌にな

ることが多かつたから……。」とそれぞれ述べており、探訪旅行を主とした旅の年譜が歌作に深く関わっていたことと重なる。小川直之著の『折口信夫——生活の古典——への誘い』によると、

自選年譜には、ともに歌集に収めた歌の理解の助けになればとのことですが、ここにはそれだけでなく、折口に旅への特段の思いがあつたからではないでしょうか。

と、旅に重きをおいていることに注目したい。そして自選の年譜に見る旅を明治二九年から昭和十一年まで、原文を引用し、満年齢を加えるなどして詳細に記述している。筆者は歌から旅をみようとしたが小川は旅から歌を眺めようとしたのだつた。

あらためて述べるまでもないが、道空歌語「ひそけさ」「かそけさ」の用例の大半もこの時期に用いられたのである。Dを境として、昭和一六年の中国北京への旅行があるものの、探訪旅行は次第に少なくなっていく。民俗探訪、各地に伝承される祭見学などからの

収獲と成果をベースにした、古代文学の民俗学的研究方法を援用しての諸論文の矢継ぎ早の発表、並びに学会活動、歌論、小説、歌集、詩集の刊行が主とされる一方、第二次太平洋大戦勃発、春洋の応召、学徒出陣壮行会など身辺も慌ただしくなっていくことなどがその理由として挙げられるだろう。何より年齢的にも五十歳半ばを過ぎつつあった。

道空の作品はこうした民俗学研究のための採訪旅行と切っても切れない関係にある。加えて、「ひそけさ」「かそけさ」の誕生と歌語としての役割は、述べてきたようにその初期に平行して大きな力を発揮したのであり、全歌集の中で大きな位置を占めていることは疑いようがない。同時にまた、やがてその基本的な範疇を出入りして柔軽に用いられ、歌に奥深さやふくらみ、陰影を醸し出してきた。本稿ではその消長を第三歌集以後に追求してきたのであった。道空が切り拓いた独自の歌境を、あらためて噛みしめたい。

## 〔注〕

1 中西洋子「釈道空短歌語彙「ひそけさ」「かそけさ」

の誕生―『海やまのあひだ』所収「供養塔」を中心に  
―「日本文化研究」第6号國學院大學栃木短期大学  
日本文化学科発行二〇二二年12月

同「釈道空短歌語彙「ひそけさ」「かそけさ」のゆくえ―第二歌集『春のことぶれ』をめぐる―」「日本文化研究」第7号所収

2 「ひそけし」「かそけし」は道空の造語として誕生したのであったが、「かそけし」についてはすでに万葉集卷一九・大伴家持作春愁三首の一首「わが宿のいささ群竹（むらたけ）吹く風の音のかそけきこの夕（ゆふべ）かも」に認められることを断っておきたい。なおここでは「音」に関わって用いられている。

3 折口信夫著・岡野弘彦編『釋道空全歌集』角川ソフィア文庫 KADOKAWA 二〇一六年6月所収略年譜

4 『道空百歌輪講1―道空短歌の読み方』歌誌「白鳥」別冊 編集発行人成瀬有

5 6 7 注3参照

8 「自選年譜1」（明治20年～昭和5年）「現代短歌全集第十三巻釈道空集」昭和五年9月改造社・折口信夫全集36中央公論新社二〇〇一年2月

- 9 「自選年譜Ⅱ」（明治20年～昭和11年）「短歌文学全集 積道空篇」第一書房・折口信夫全集36中央公論新社二〇〇一年2月
- 10 小川直之著『折口信夫―生活の古典―への誘い』伊那民研叢書8 柳田国男記念伊那民俗学研究所二〇二四年5月
- 11 「日光」創刊に参加。「日本文学の発生」第一稿（晩年まで稿を重ねる）。「歌の円寂する時」。「水の女」。「古代研究」民俗学篇1、Ⅱ国文学篇刊行。学位論文『古代研究』国文学篇中、万葉集に関する研究。「短歌研究」創刊、選者。民間伝承の会発足。「琉球国王の出自」。『短歌文学全集』積道空篇刊行。「橘曙覧評伝」刊行。『死者の書』刊行。『日本芸能史六講』刊行。『古代感愛集』刊行。『日本文学の発生 序説』刊行。『世々の歌びと』刊行。『日本文学啓蒙』刊行。（以上昭和二十五年までの主論文、歌論など、註2の略年譜による。歌集はDまで含む）
- ※ 初編、続編、本稿に提示した各歌集における「ひそけさ」「かそけさ」の使用例（訂正数を含む）は、すでに松本博明著『折口信夫の生成』（おうふう二〇一五年3月）

の第一章第一節「三信遠の旅と「かそけさ」「ひそけさ」の境地」に提示されている。その内、本稿との二語の数字の差異が認められる点については、視点の相違やことばの幅のとらえ方からくることに起因するのではないかと思う。この点について、初編、続編の中で触れなかったことをここにお詫びする次第である。

改めてとらえ直すと共に、刺激を多く受けたことを感謝している。